

香りと詩的表現

The Way of Incense and Poetic Expression in Japanese

澤田美恵子
Mieko SAWADA

京都工芸繊維大学 基盤科学系
Faculty of Arts and Sciences,
Kyoto Institute of Technology

E-mail : samieko@kit.ac.jp

(2021年6月23日原稿受理 2021年12月13日採用決定)

要旨

香りを楽しむという文化は世界各地にあるが、日本においては「香道」という、香りを鑑賞する様式が独自に確立された。本稿では香道について概説した後、認知科学の視点から香道における香りの鑑賞方法を分析した。嗅覚は個人差が大きく、他者と自分がある天然の香りを嗅いで、完全に同じ感じ方をしているかを確かめることは困難である。香道の鑑賞方法は、香りを集団においても個人的に聞け(嗅げ)、個人のなかでの同一性の判断が完結できる仕組みのなか、香りの記憶を想起させるために再認の方法が確立されていることが分析された。香道の鑑賞方法は嗅覚の特性を鑑みても理にかなっていた。また香道で使われる香りの対象である香木の命銘や香席においてテーマとなる言語表現は、伝統的に和歌などから引かれた詩的なものであるが、それは人の記憶の想起を促進させるために有意味な方法であることが理解された。本稿ではさらに、香道における香りについての言語表現を観察し、分析したことから、日常言語における詩的表現の機能の一端についても明らかにした。結果「詩的表現とは今ここではない時空を想起させる言語表現であり、ある言語表現が詩的表現であるか否かは発信者または受信者の背景知識に依存する」と定義した。香道の詩的表現により構築される時空は、緩やかに限定された仮想世界であり、その仮想世界を基盤として他者と香りについて語り合うことが可能となるのである。

キーワード

香道 香り 香木 詩的表現 再認 認知科学

0. はじめに

香りを楽しむという文化は世界各地にあるが、日本においては「香道」という、香りを鑑賞し詩的な言葉で表現する独自の様式が、受け継がれてきている。現在、香道の二大流派は御家流と志野流である。1500年前後に確立されていった香道の様式は、御家流の祖とされる三条西実隆が公家社会に、志野流の祖とされる志野宗信が武家社会に伝えたというのが一般的な見解である¹⁾。しかしながら、詳細については未だ解明されていない。香道は日本独自の他の芸道である茶道や華道ほど、身近で経験できるものではなく、認知言語学の観点から香道を分析した研究も管見のかぎり皆無であった。

本稿では、認知科学的視点から香道を分析し、香りと詩的表現の関係性を明瞭にすることを主目的とする。また、次の下位目的を設定する。(1)香木の特性を明確化する。(2)香道の鑑賞様式を分析する。(3)香りと詩的表現の関係性を究明する。(4)詩的表現の機能の一端を定義する。

次に、本稿で取り扱う香道に関する資料について述べる²⁾。香木と香道に関して、主に山田³⁾、本間⁴⁾、及び松原⁵⁾を参照し、香木の特性の明確化と香道の鑑賞様式の分析を行った。さらに、香木と香道に精通した専門家 1名への半構造化法による聞き取り調査により具体的な事象を明らかにした。聞き取りのための要素としては、香木の流通、香りの記憶法、香室の特性を挙げた。香道における詩的表現に関しては、三条西⁶⁾を参照した。香道の文献は、通例により漢数字を使っており、本稿も算用数字のみに統一していない。

日本には『万葉集』や『古今集』の和歌にも香りを詠むものがあり、『源氏物語』においても平安時代の貴族たちが纏う衣服に自分独自の香りを炷きしめ、香り⁷⁾を宮廷生活のなかに取り入れていたことが描かれている⁸⁾。おそらく1000年以上前から都における日本の天皇と貴族の生活において、香と和歌などの詩的な言語表現は生活の中で自然に結びついていったと思われる。時が流れ権力を持った武家の間でも香が嗜まれるようになり、貴重な香木は権力の象徴ともなっていった。戦国時代に入り、織田信長が現在も正倉院に保管されている香木である「蘭奢待」を天皇に所望し切り取ったこと⁹⁾は、今に伝わる話である。香道は皮肉にもこういった戦乱を背景に、室町幕府八代将軍足利義政(1436-1490)の近くであって和歌や連歌に造詣が深い人たちの間で、現代に伝わる様式の原因が伝承されていった¹⁰⁾。

香道において他者と香りについて語り合う言葉として用いられていたのは、古くから伝わる和歌や和歌から引用された語句といった詩的表現であった。なぜ詩的表現が使われたのかということについて、また室町時代中期から約500年以上もの間、香りの表現に詩的表現を使うことが受け継がれてきているのかについては理由があるように思われる。

また香道では対象となる香りを鑑賞する様式が整っていることにも注目したい。瞳を閉じて静かに香を「聞く」¹¹⁾のであり、五感のなかでも嗅覚に特化してこれを研ぎ澄ませ、視覚、聴覚、触覚、味覚から自由になり、さらに想像の翼を広げて、今ここという世界と異なる仮想の空間にたゆたう。香道の香りの対象となる香木は自然物であるため、一つとして同じものはなく、しかもその小片に熱を加えることによって香りも時間とともに変化する。もし、時間において点としての香りを正確に表現したければ、「今は～」 「しばらく時間が経つと～」 「最後は～」とその変化を述べていくほかない。香木の香りは刻々と変化し、やがて消えてゆく。ゆえに香木の香りを表現する言葉もまた時間の経過で変化するその様を捉えていなければならない。香道において鑑賞される香木は銘をもつが、それは香銘と呼ばれる。多種多様な香木に銘を付けるとなると、言葉探しが困難であることはたやすく想像できる。実際、香銘は、多くの香木で嗅覚を鍛え、しかも古典文学の素養を身

につけた他者が納得いくものでなければならなかった。現代でも香木の香銘に和歌や和歌の一部を引いた詩的表現が使われているのには、このような背景がある。本稿において香道における詩的表現を分析することによって、そもそも詩的表現とはどのような性質のものなのかということも明らかになっていくはずだが、この点については3節において詳述する。

本来、匂いというものは、人工的な手を加えない限り、空間に蔓延するものであり、他者とともに存在する狭い空間において個人的な経験に限定することは困難である。例えば、飛行機のなかでは、お気に入りのひざ掛けを触り、一人で映画を見て、機内食を楽しむことができる。この例から触覚、視覚、聴覚、味覚を個人的なものとするのが現在の技術では簡単に可能であることがわかる。しかし嗅覚に関しては、ファーストクラスにでも乗らない限り、他者の匂いを自ずと感じてしまうものだ。つまり現代においても嗅覚は他者とともに存在する狭い空間においてコントロールが難しいものに留まっている。ところが香道においては、香りの鑑賞の様式が確立しており、他者と同室にあったとしても個人的に集中して香りが鑑賞できるのである。また嗅覚は個人差が大きく、他者と自分がある天然の香りをそれぞれ嗅いでも、その感じ方は異なる。ところが、香道においては香りを鑑賞する際に同室にいた他者と香りについて語り合うことが、協調的に成立している。さらに香道における香りの鑑賞方法が、集団においても個人として香りに集中することができ、個人のなかで香りの同一性の判断を完結させる仕組みとなっているのは驚くべきことだ。さらに香道において鑑賞の対象となる香木の命銘は、和歌などから引かれた詩的な表現である。認知科学では、香りに名前があることは記憶の想起を促進させるために有効な方法であることが指摘されている。

本稿において、認知科学的視点から香道を観察すると、非常に興味深いことが明らかになっていく。1節では自然物である香木の特性を明確化する。2節からは、認知科学的視点を取り入れて考察していき、まずは香道の鑑賞様式を分析する。3節では、香道において使われる詩的表現について考察し、香りとの関係性を究明する。4節では、香道を分析することによって知りえた詩的表現と香りの関係性から、日常言語の詩的表現の基本的な機能の一端を明らかにする。5節で、本稿の結論を述べる。

1. 香木の特性の明確化

1. 1. 香木

本間¹²⁾によると「未だ『香道』とは称していないとは言え、宗教的用途から離れ『香木単体を用い、組香を主体として香の香りを鑑賞する』といった現在に受け継がれる香道の要素が揃ったのは室町時代中期と言ってよい」とされている。

つまり、日本において、1500年前後には香木のみを使い香りを楽しむ様式ができあがっていたと考えられる。香木は天然香料であり、自然のなかで生成される。それゆえの一つとして同じ香りがない。香道において、まさに香りは一期一会のものであるのだ。この点は本稿の観察において、非常に重要である。

日本において史料として迎える香木についての記載は『日本書紀』にあり、595年に現在では香木として分類される沈香（じんこう）が淡路島に漂着したと伝えられている¹³⁾。沈香とは、東南アジアなどに見られるジンチョウゲ科の沈香樹という樹の一部が、病変または傷つき、樹の内部に樹脂が滲み出し溜り沈着した部分であり、この樹脂は長い時間、時には100年以上もかけてゆっくりと菌が作用し熟成して、香りを放つようになる。沈香は、樹脂の緊密度が高い場合は水に沈むことが多

いことから、「水に沈む香木」という意味で「沈香」と呼ばれるようになった¹⁴⁾。

また沈香のなかでも高品質のものは伽羅（きゃら）として珍重されるようになる。沈香や伽羅が生成されるのは非常に限られた地域であり、当地域特有の自然の条件のもと100年以上の時間が必要である。現在では絶滅危惧種を保護するワシントン条約により輸出入が規制されている¹⁵⁾。

沈香と伽羅以外に香道において使われる香木は白檀（びやくだん）である。白檀は沈香や伽羅とは異なり、インドやインドネシア、オーストラリアなどで見られる熱帯性常緑樹のビャクダン科ビャクダンという植物そのものを指す。樹の幹の芯の部分に高品質の香りの精油が生成されるのには長い年月がかかるうえ、半寄生植物であるために人工的な植林も難しい¹⁶⁾。

このように香道で鑑賞される香りは沈香、伽羅、白檀という香木であり、いずれも自然のなかで長時間かけて生み出された香りであり、人工的に作り出されたものではない。ゆえに切り出された木の小片も一つとして同じものがないと言える。現在、伽羅をはじめ、沈香はますます希少なものとなり、白檀でさえも同じ道を辿っている。これらの香木は日本で採取できないために、もともと希少価値が高く、日本に漂着した6世紀以来長い間、天皇とその近くにいた人たちで鑑賞されてきた。さらに香道の様式が確立していったとされる室町時代から明治維新に至っても、その時代の貿易を制していたものが天皇に献上することが多かった¹⁷⁾。つまり香道は日本において限られた人々のなかで育まれてきた芸道と考えられる。

1. 2. 香りの分類

現代でも使われている香道における香りの分類は、六国五味（りっこくごみ）といわれるものである。六国は、木所（きどころ）とも呼ばれ、産出地と出荷港などを基準に沈香が分類されたものである。香道では人々が集まって香りを鑑賞する場合は、沈香が使われ、白檀はほぼ使われない。香りの性質によって伽羅（きゃら）、羅国（らくこく）、真那賀（まなか）、真南蛮（まなばん）、寸門陀羅（すもんだら）、佐曾羅（さそら）の六種に分類される¹⁸⁾。しかしながらこの香りがどのようなものかを説明する言語は、花や六歌仙に例えたものであり、記憶するためにはそれほど役に立たず、結局は何度も自分自身の身体を使い、香りを嗅いで、名前とともにその香りのカテゴリーを、それぞれ覚えやすい個人的な方法で記憶に留めなければならない。また五味は香木の味を指す言葉であり、甘、苦、辛、酸、鹹（塩辛）に分類される。香木の香りは時間とともに変化していく。例えば最初は甘く感じて、次第に変化し、最後は塩辛くなる場合もあって、その結果、香りを分類するためには多くの経験と鍛錬が必要となる。

五味のように香りを表す言語表現に味覚を表すものが多いのは、味覚と嗅覚がなかなか分かちがたいものだからである。嗅覚の研究では、「プルースト現象（Proust phenomenon）」という用語がよく使われる。「プルースト現象」とは、ある匂いとのおぼろげな思い出から、突然昔の記憶が隅々まで蘇っていき、あたかもそれを追体験しているかのように思い出される現象である。フランスの小説家マルセル・プルーストの大作『失われた時を求めて』¹⁹⁾において、主人公がお茶に浸したマドレーヌのかけらをスプーンで口に含んだとき、幼い頃の思い出が鮮やかに蘇ったという記述から付けられた名称である。フランス語で書かれた原書を辿ると、お茶に浸したマドレーヌが口蓋（palais）に入ったときに思い出が蘇ったことがわかる。口蓋では味覚、嗅覚、触覚などの知覚も総動員されているのであるから、実際に主人公が古い記憶を思い出したきっかけは嗅覚のみではなかったかもしれない。鼻から入った香りは口のなかにも入るので、香りを表す言語表現に味覚を表す「甘い」や「酸っぱい」などの言葉が多く使われるのは、自然なことである。実際に、香木でも伽

羅の場合は鑑定士が香木のかげらを口に含んで噛んで味覚で確かめる場合もあり、やはり嗅覚のみで鑑定しているわけではない。まずは香木の様子を視覚で確かめ、叩いて聴覚で音を聞き、触って質感を感じるといった具合に、五感を使って鑑定しているのが常であるようだ²⁰⁾。

一つの感覚器官によって複数の感覚を知覚する現象、例えばある香りを嗅ぐと音が聞こえるなどの現象は、共感覚(synesthesia)と呼ばれているが、認知科学的研究はまだ進んでおらず、本稿では香道について共感覚からの分析は試みない。

1. 3. 香銘（香木の銘）と文学的素養

松原²¹⁾は沈香についての文化史を辿るなかで「当時の文化人による名香合も催されている。文明十（一四七八）年十一月十六日の東山殿における六種薫物合、翌十一年五月十二日同じく東山殿における足利義政の六番香合、また文亀元（一五〇一）年五月二十九日志野宗信宅の名香合などである。参集者はそれぞれ香を持ちより、左右に分かれて二種の香気を比較し優劣をきめ、その判定の基準には香銘も重要な要素となり、深い文学的素養のもとに判定の言葉がそえられる」と述べている。

ここに記されている名香合（めいこうあわせ）とは、持ち寄った好みの香木の優劣を競い合うものだが、その判定要素として香銘が重要であったことから、既に言語表現と香りとが密接な関係にあったということがわかる。香銘は和歌から引用されたものが多いが、連歌との関係も指摘しておかねばならない。名香合が流行していた頃、時を同じくして連歌の様式も整ってきたからである。

連歌は、数人以上で会が催され、まず発句が読み上げられると参会者が相応しい脇句を考え、脇句が提示されると発句と脇句の世界をイメージし、それを受けてまた第三句と、連想される世界で遊び、句をつくっていくものである。

木藤²²⁾は連歌の形成と展開について、その概要を次のように述べている。

連歌の特質を考えるにあたって、どの時代の作品を対象にするかが問題であるが、ここでは南北朝時代から近世初期に至る広義の完成期の作品について、その特色を抽出してみたいと思う。最初に連歌の詩形について考えてみると、五七五の発句を七七の脇句で受け、さらに五七五の第三句に転じ、以下七七の短句と五七五の長句を交互にくり返して百句に至るのを原則としている。この長大な詩は二、三人以上十数人の参会者の協同で制作されるのが普通であるが、作品全体としてみる時には、何らまとまったことを叙述しているわけでもなく、また、首尾一貫した気分情調を詠もうとしているわけでもない。むしろ、一句ごとに主題が移動し、同一主題に停滞しないところにその生命があるといってもよさそうである。（中略）連歌の用語は磨きのかかった歌語であり、その理想とした美は、超現実的な優越美であった。それは乱世の現実にはどこにも存在しないものであり、それがゆえにまた中世の心を深くとらえたものと思われる。

香銘からイメージを連鎖させて、次の香の鑑賞へと繋げていく炷継香(たきつぎこう)²³⁾も、このような連歌の様式を香の鑑賞に応用するかたちで、同じ時代に流行したのだった。現代、御家流の祖とされ、足利義政の時代に宮中の香をつかさどる「香所預」であった三条西実隆について、本間²⁴⁾はこう指摘している。「実隆邸での香会は、自邸を使用しているものの実隆自身は積極的に香会を催してはおらず、香や薫物などの材料や飲食物の提供、歌を詠む趣向等、宗祇の働きが大きく作

用し、むしろ宗祇主導の会であったと言える。従来、宗祇は連歌師としての業績や実隆の古今伝授の師として取り上げられ、香との深い関わりについては指摘されてこなかったのであるが、宗祇こそが香会開催に強く関わっていたことがわかる」

応仁の乱の最中、美しいイメージの世界を次から次へと渡っていく遊戯である連歌と香りが結びついた会が乱世を厭った文化人の心を掴んだことは想像に難くない。日本における香木の鑑賞において、香りと和歌を組み合わせる楽しむ遊戯は、現在の香道においても行われる組香の礎をつくっていった。

2. 香道の鑑賞様式の分析

2. 1. 組香

現在、香道の二大流派である御家流と志野流は作法において細かなところで差異が見られるが、本稿においては「香木単体を用い、組香を主体として香の香りを鑑賞する」²⁵⁾という、二つの流派に共通し、分析上必要となる点のみを抽出して観察を試みたい。

前述したように戦国時代には名香合などが流行し、現代に到る様式は整いつつあったが、江戸時代に入り、17世紀半ば頃から香道という名前が使われ始め、後に伝わる香道書も残されるようになる²⁶⁾。

香道における組香は、十人ほどが十畳の部屋に集まり、円座になって香木の香りを鑑賞する。この集まりを「香席」、その部屋を「香室」という。香席では、亭主となる「香元」、香席の記録をして採点する「執筆」、客となる「連衆」が香炉を順々に手渡して香を鑑賞する。香室は十畳の広さが基本で、湿度が高い環境が良いとされる。十畳の香室に十人が集まれば、半畳に一人が座り、円座になって中央に空間をつくる。京間の畳は一畳が191cm×95.5cmであるので、その半分が一人の基本的なスペースとなる。



写真1 聞香炉

使用する香炉は、凡そ直径7cmで高さ6cmの円柱型の磁器が多く聞香炉と呼ばれる(写真1)²⁷⁾。聞香炉のなかに灰を入れて、火が熾っている炭団を聞香炉の灰の高さと同じになるように埋め、その後灰を中央に集めて、炭団に被せるように山を作り、その灰山の頂点から炭団に当たるまで垂直に火箸などで穴をあける。この穴は火窓と呼ばれ、熱が伝わる通路となる。灰の頂点、火窓の上に香木を置くが、灰や熱源を直接あてないために銀縁で止められた約20mm×20mmの薄い雲母の板「銀葉」を敷く。銀葉の上には、十人の集まりの場合、基本的には香木を1mmの薄さ5mm×5mmの正方形の大きさにしたものが載せられる。

間接的に熱が伝えられた香木は煙を立てずに気化して香りを放ち、連衆は上座から順に自分のところに回ってきた香炉を左手に載せ、左手親指を香炉の上部にかけて持ち、香炉の口を右手で覆っ

て香りを逃がさないようにして、右手親指と人指し指の間の空間に軽く鼻を近づけて、香りを吸い、息は香炉にかからないように下座の方向にやや下向きに吐く。これを原則として三回（三息）、または五回（五息）行う。時間にすると、約30秒から1分程度、香りを聞く（嗅ぐ）ことになる。

この様式を分析すると、組香においては鑑賞の対象である香木の香りは強いものではなく、次の香りを嗅ぎ分けることを妨害するほどには、部屋全体に香りが充満していないこと、香炉を手で囲いそのわずかな隙間から香りを鑑賞するために、異なる香りが次々と回ってきても、個人的に聞き（嗅ぎ）分けられる状態であることが重要であると指摘できる。香席に参加するときには香水や花などの強い香りを香席にもちこむことは基本的に禁止されており、香席が始まる前の香室は人があえて意識するような臭いがない状態に保たれている。その状況のなか手で囲い込み、かすかな香りを個人的に鑑賞していくのだ。しかしながら、実際には香席から離れた後の帰り道など、自分の髪や着物に香席での香りが移っていることに気づくことがしばしばある。この現象は香りの性質上、長く同じ室内で香りを嗅いでいるとその香りが意識されなくなっていくことが理由で、香会から離れて初めて、香室での香りが自分に移っていることに気づくのであろう。また御家流には香席の終了を告げるために、香席の最後に香元が「香満ちました」と挨拶することがある。「香満ちました」という言葉は、香室に香りが満ち、もうこれ以上はこの室内において、香りが聞き（嗅ぎ）分けられないという意味が含まれているのかもしれない²⁸⁾。

香席は同じ室内に十人ほどが集まるのだが、参加者の一人ひとりが静かに個人的に集中して香りを鑑賞できるようになっている様式には注目すべきだろう。そうした様式が確立されている理由は、香道における組香が参加者に個人として競い合わせるゲーム形式となっていることにも由来する。

現在、伝わっている組香には大きく分けて二種類がある。一つは試香がある形式である。まず見本となる名前が教えられた香木（試香と呼ぶ）が一つまたは複数回ってくるので、その香りを聞いて（嗅いで）、特徴を名前とともに覚えておく。次に回されてくる香木は名前を知らされないので、最初に回ってきた香木のどれであるかを当て、その名前を記す。あるいは試香では聞いて（嗅いで）いなかった香りであると当てる形式である。もう一つの形式は、試香がなく回されてくるいくつかの香木の何番目と何番目が、同じ香りであるかを当てる形式である²⁹⁾。

こういったゲーム形式をとるために、参加者同士はいわば競技者である。ゆえに香りについて話し合っって異同を統一する必要がない。例えばこの香席に十人がいて、一人が1分近くその香木の香りを鑑賞すると、時間の経過のなかで、実際には香りの立ち方や香味が少しずつ異なっていく。しかしながら席順は変わらないので、ある参加者はどの香木もほぼ同じ時間が経過したものを同じ場所で嗅げる。参加者は香木を一人で長く嗅いでいると他の人に迷惑をかけると知っているため、入門書では3息（3回）で香りを聞き（嗅ぎ）わけるという約束事が書かれている³⁰⁾のである。

2. 2. 聞き取り調査

本稿では、文献では見出せなかったこととして、現在実際に流通する香木の価格や、香りの具体的な記憶の方法、香室の特性を知るために、香木と香道に精通し、個人で香室を持つ専門家1名への半構造化法による聞き取り調査を行った。聞き取りのための要素としては、香木の流通、香りの記憶法、香室の特性を採り上げた。

2. 2. 1. 聞き取り調査（interview）の方法

インタビューイ（interviewee）に香木と香道に精通した専門家として、山田松香木店の代表取締役

役会長である山田英夫（72歳）³¹⁾を選び、1回目2021年2月12日午後2時から4時、2回目2021年6月30日午後1時半から3時半、山田松香木店（京都府京都市上京区勘解由小路町164）の階上にある、山田松香木店所有の香室で、聞き取り調査を行なった。インタビューーとインタビュアー（著者）は、2006年以来の香道の研究・教育を通じて交流を深めてきた。インタビュアーは、2015年にもインタビューーに香木についての聞き取り調査を行い、『京の工芸ものがたり』「香木の声」を執筆している³²⁾。1回目2021年2月12日午後2時から4時は、事前に論文執筆のためであるという趣旨を説明し、香木と香道について、インタビューーの経験を語ってもらい、そこから話題を膨らませる半構造化インタビューを行った。特に調査したいと考えていた香りの記憶法については、インタビューーのプライバシーに関わる人が多いと予想されたため、警戒心を避け自由に話せる環境をつくるために録音は行わなかった。本稿に必要な部分のみメモを取り、文章化後にインタビューーに確認をとり、公開する許可を得た。また香りの鑑賞の仕方の写真と、掛け軸にあった銀閣寺弄清亭の写真は、ともに本稿に必要であったため撮影し、文章の説明とともに確認を取って、公開する許可を得た。2回目は、予め録音・録画を行う許可をもらい、インタビューーに確認後に公開可能とする了解を得て行った。最初に、構造化インタビューとして、①香木について、②香道について、③香の聞き方について、話してもらうことを伝えた。また録画・録音の途中でも、インタビュアーが必要と考えれば質問する許可を得て、半構造化インタビューの形式でも行った。録音・録画収録時間はそれぞれ、①香木について18分50秒、②香道について17分57秒、③香の聞き方24分24秒である。聞き取り調査により、文献では確認できなかった実際の香木の流通価格、個人的な香りの記憶法、香室の特性などの事象が明らかにできた。

2. 2. 2. 聞き取り調査のまとめ

明治維新までは、香道の中心は京都にあったが、明治以降、御家流は東京、志野流は名古屋に居が移されている。江戸時代の寛政年間に創業された香木専門店「山田松香木店」は、京都御所近くにあり香木を中心とした商いを行うだけでなく、香道の家元を招いた教室も開いている。山田英夫は、この店の社長を勤め上げ、現在は代表取締役会長である。香木店の仕事は原産地より香木を直接買い付け、輸入、鑑別、製品化を行うことが主であり、山田はこの道50年の専門家である。近年では『香木のきほん図鑑』も出版している。200年以上も香木も扱ってきた家に生まれた山田は幼少時より、香木が身近にあるところ、これを見たり触ったりするなかで育ったが、特別な香りの識別の教育はなかったという。良質の香木は主に東南アジアが原産国であり、工房で500種類以上にも識別される。香道用の香木は、職人の手により、もともといびつな香木が一定の厚さに輪切りされ、さらに一ミリの厚さにして、最終的には5mm×5mmの大きさに仕上げられてできあがる。

古来より金に等しいと言われてきた伽羅についての流通価格については「現在グラム5万から7万、高いものはそれ以上の価格となることがあるほど高騰し、現在は高止まりしている」ということであつた。山田に香りの記憶方法について尋ねたところ「自分は若い頃ジャズを良く聴いていたので、音楽に例えることが多い。例えば、曲の始まり方や流れ、テンポやリズム、楽器の音に例えたりします」「でも人それぞれ生きてきた道のりが違いますから、また言語化できないものなので、香りの記憶の仕方はそれぞれ違うものだと思います」と語った。



写真2 香の聞き方

また山田は香道も長年に渡り学んでいる。香道における香りの鑑賞の仕方を、山田に実演してもらった(写真2)。2.4で詳述した通りの聞き方であるが、写真を見ることによって、香木の小片との距離感がよく理解できると思われる。このような距離感で、香りを手で囲い込み鑑賞するのである。

「香室は十畳の広さで、湿度が高い環境が良いとされる」と、2.1で述べたが、銀閣寺弄清亭が香室の基本とされることが多く、香道で使われる掛軸にも銀閣寺弄清亭が描かれていた。



図1 銀閣寺弄清亭

図1は、掛軸を写真撮影し、弄清亭の絵の部分のみを切り取ったものである。弄清亭は香室の理想とされる環境であり、池の上に建てられているため適度な湿気があるとともに、戸が開けられ換気ができる畳十畳の広さの部屋である。

弄清亭のような環境の香室では、香木の小片の香りが充満することはなく、個人的に香りを鑑賞することが難しくない。このような環境のなか、組香では自分の手で囲った微かな香りを識別し、個人として完結した香りの異同の結論を下しているのである。

3. 香りと詩的表現の関係性の究明

さて、香木には香銘がつけられている。香木に相応しい香銘をつけることは上述した戦国時代の名香合以来重要とされたことだが、それは現在においても同様で、銘をつける場合は、現代の短歌や俳句は用いられず、古典の和歌に限られる。

また、ほとんどの組香には「証歌」と呼ばれる和歌がテーマとして設定されており、その言葉に込められた意味を知っていることが重要とされている。組香の席では、その日のテーマに沿った香銘の香木が選ばれ、香室がしつらえられている。参加する者は、そのテーマに沿うように纏う着物を選び、テーマの意味や歴史、それにまつわる物語を知っておかなければならない。こういった文学的素養があってこそ、組香がより一層楽しめるのである。

香道における香りと言語表現の関係の深さについて、国文学者であり、御家流宗家であった三条西³³⁾は次のように述べている。

香気の鑑賞は、香そのものがよく識別されてからの、さらに一步深い分野において、はじめてくる芸術的な感情の世界にほかならない。小さくいえば香銘とその香の匂いとの関係も鑑賞の分野となるので、一炷間とする鑑賞香が成立する。(中略) 炷継香や組香が生まれたのも、香気と銘との関係が芸術的に結びついたためである。ここで詩歌銘をもつ香を紹介してみよう。

鳥羽玉の夜の間の風の朝戸出におもふに過ぎて匂う梅が枝(『拾遺愚草』)

という和歌を証歌として命銘された「鳥羽玉」という真南蛮について考えてみるに、こうした

歌銘の場合は、和歌と香気とに、なにか相通ずるものがなくてはならぬはずなのである。(中略)

鳥羽玉という銘は、たぶん証歌の第四句、すなわち「思うに過ぎて匂ふ」とあるところが、この香に相通ずるためにつけられたのであろう。さすればこの香が真南蛮とはいえ、そのたちが伽羅に類似している趣きが察せられてくるはずである。したがって「思うに過ぎて匂ふ」の一句が、どれだけこの香に力を与えているかが知られるし、さらに考えれば、その「思ふに過ぎ」た匂いとはいかなるものか、というところにもおよんでくる。このときにもやはり証歌から教えられるところが多々ある。

ここで述べられている一炷聞とは香木の香りを一人で心静かに鑑賞し、香銘について思いを馳せ、俗世の雑念を消し、最後には無我の境地に到ろうとするものである。組香において、十人が十畳の同じ空間にいたとしても、互いに競うゲーム形式が前提であるので、自分の手で囲ったかすかな香りを個人的に鑑賞し個人それぞれのなかで香りを同一か否か識別している。例え他の人が同じ空間にいても、ゲームの遂行には自分の嗅覚を研ぎ澄まし、個人のなかで完結した結論を出すことが要求される。つまり香道では、上述のように集団のなかにおいても、個人的に香りを聞き、その香りと証歌や香銘との関係に考えを巡らし、個人的な仮想の世界、今ここでない世界にたゆたうことが可能なシステムになっていると言えよう。

哺乳動物において嗅覚は、敵味方を見分ける、餌を探す、危険を避ける、帰るべき場所を探すなど生きることに密接に関わった重要な感覚である。しかしながら、言語を獲得した人間においては他の動物と異なり、嗅覚は言語表現と強く結びついて発達することとなった。他者にどんな匂いか伝えるために、他者と匂いについてわかりあい、語り合うために、形を持ちえない匂い、目に見えない匂いを言語化し表現してみようと試みる。しかしながら、人間という生き物が自分の嗅覚によって得た匂いの経験というものは非常に個人的なものであり、快か不快かを伝えることは簡単であっても、それ以上に生き物としての自分に何が起こったかを詳細に言語で伝えることは意外に難しい。つまり、個々の物語を生きてきて、世界を異なる解釈で見ている人間が、匂いによってそれぞれの肉体のなかで起こった出来事を、他者が理解可能なかたちで言語化するという事は簡単なことではない。自分だけの体験を自分の物語や解釈が許す言葉で語ることになるが、そのような言葉は他者からすると理解困難だからである。

ゆえに香道において嗅覚を研ぎ澄まし香りをかぎ分け、香りを表現する者は、けっしてわかりあえない、けっして同じ感じ方を共有できるはずがないと、断念したうえで、それでも言葉を紡ぎ他者に伝えようと試みる。その諦めのうえに、少しでも共通する何か、少しでも共感できる何か、つまり他者との「同じ」を手探りで探すように言葉を探す。香道においては、一人で香りを鑑賞する一炷聞の場合、他者にその香りについて語る必要はないが、その香りに銘をつけるとなると、他者にも理解してもらえるように、香に密接に関係した銘が必要となる。また組香の場合は十人が、同じ時間、同じ対象の香りをともに鑑賞するのであるから、何か共感するものがあつた方が楽しいであろう。香席に香りに関連するテーマを設定し、参加者がそのテーマを共有し香りに関連することに共感すると、香りに導かれたゆるやかな共同体を形成する可能性が生まれる。香道において、他者と香りについて語るときに使われる言葉は、繰り返し述べてきたように、香銘も香席のテーマとなる証歌なども、和歌などから引かれた詩的な言語表現が使われていた。この詩的な言語表現が、伝統的な文学的仮想の空間という共有のベースを惹起することによって、他者との間に嗅覚の個人差を許しながらも、参加者同士の共感を可能にしたのではないだろうか。ここでは、香道におい

ての香りの鑑賞方法における詩的な言語表現について、認知科学的視点から分析を試みたい。

認知科学では、頭在記憶を想起するには、大きく分けて二つの方法があるとされている。一つは経験したことをそのまま思い出す「再生」の方法であり、もう一つは経験したことを提示された選択肢の中から指定する「再認」の方法である。香道の組香においては、最初に試香を嗅ぎ香銘とともに覚えておき、次に回ってきた香り（香銘を知らされていないもの）について、最初の試香か否かを当てる場合と、いくつかの香りを聞いて、その何番目と何番目が同じであったかを当てる場合があった。これはいずれも選択肢があるので再認の方法と言える。

山本³⁴⁾によれば、嗅覚と自伝的記憶に関する心理学的研究において言語との関係性は「匂いそれ自体の記憶においては、言語的符号化が規定要因の一つとして考えられており、促進効果あるいは妨害効果が生起する可能性が示唆されている」。さらに彼はその詳細について、以下のように指摘する。

嗅覚の認知処理過程を通して行われる言語処理による自伝的記憶の想起の促進、あるいは妨害効果が生じる原因については、質的に異なる2つの言語情報の活性化パターンが関与していると考えられる。一つは“あの時、あの場所で嗅いだ匂い”のような極めて特定の命名が行われる場合である。（中略）この場合には、命名段階ですでに自伝的記憶構造内の情報が豊富に活性化されているため、ある特定の出来事に関する記憶が想起されやすくなり、促進効果が生じると考えられる。いま一つは、その匂いが極めて一般的なものであった場合に生じる。

“コーヒー”や“オレンジ”などの単純な言語ラベルによる命名である。この場合には、命名においてそれ以上の情報を探査する必要がないため、自伝的記憶構造内の情報がほとんど活性化されないものと推測される。

自伝的記憶について山本は「自己である主体が直接的に経験した過去の出来事に関する記憶」と定義している³⁵⁾。つまり、山本による心理学的実験結果によると、匂いを記憶するために、言語を使って命名した方が、記憶の想起を促進させるが、匂いと言語的命名が一致しないと想起されにくくなる。また促進効果が生じるのは、特定できる場所で特定できる時間に嗅いだ匂いに対して、特定の命名をもつ場合である。この場合は、個人的な記憶の情報が活性化されているため、ある特定の出来事に関する自伝的記憶が想起されやすくなり、その命名によって促進効果が生じる。反対に、一般的な匂いに対して、コーヒーやオレンジなどよく使われる普通名詞で命名した場合は、個人的で特別な記憶の情報がほとんど活性化されず、自伝的記憶は想起されにくいと考えられている。

Herz, R.S., & Cupchik, G.C.³⁶⁾の実験でも、匂いのみにより個人的な記憶の想起を求めた場合と、匂いに命名して個人的な記憶の想起を求めた場合を比較した場合とでは、命名された匂いによって想起された記憶の方がより明確であることが報告されている。

Willander & Larsson³⁷⁾では、さらに匂いだけ、言語ラベルだけで想起したよりも、匂いと言語ラベルの両方、つまり匂いに言語ラベルをつけて想起した場合の方が、情動的で追体験感覚を伴ったものであることが報告されている。

香道において香木に銘をつける場合、香りの鑑賞において経験値が高い人が、四季のどの時期に聞くべきかを見極めてから付ける。日本という環境のなか、日本語が第一言語で日本の古典文学の素養をもつ人々の手によるならば、匂いとその名は限りなく相応しいものである場合が多いだろう。また命銘側ではなく、鑑賞側であったとしても、香席の場は香りを鑑賞する適切な環境が整えられ

ており、場所と時間が特定され、古典文学からの命名がされているために、匂いの記憶に対して促進効果が高いと考えられる。

例えば、「誰か里」という名の香木がでてきたとしよう。この銘はある香木に江戸時代の御水尾院が銘をつけたとされている。「誰か里」は、「心あらば とはましものを 梅が香に 誰里よりか 匂ひ来つらむ」という新古今和歌集のなかの源俊頼が詠んだ和歌を背景にしている。この背景知識がなければ、「誰か里」という銘を聞いても、どうしてこの香りにこの銘がついているのか、まったくわからない。香銘が古典の和歌から取って銘がつけられているものは、解釈者の背景知識に和歌についての情報が書き込まれていなければ、その銘が引かれた和歌を思い出すことも、その和歌がイメージする世界を想像することもできない。しかし「誰か里」が導く和歌を理解し、その和歌の世界へと想像の翼を広げることができれば、香りと「誰か里」という言語表現はその香を聞いた（嗅いだ）香席での思い出として、しっかりと記憶に刻まれる。ここからわかるように、ある言語表現が有意味で詩的であるか否かは、発信者と受信者の背景知識に依存する。

上述したように心理学の実験では、一般的な香りに対してその命名がコーヒーやオレンジなど、これまた非常に一般的でありふれた普通名詞によるものであった場合は、記憶が想起されにくいという結果を示していた。しかし、非常に稀なケースかもしれないが、ある香りに「チョコレート」という普通名詞で命名されていたとしても、ある人にとって当該のチョコレートという名の香りが、固有の思い出と結びついているならば、それは特定の可能性がある。例えば、ある人が生まれて初めてチョコレートをとても好きな人と食べた場合は、特別で個人的な思い出となり、「チョコレート」という普通名詞を手がかりに、またチョコレートの香りを手がかりに、個人的で特別な思い出の時空が想起される可能性もあろう。つまり、ある香りが一般的か否か、ある言葉が一般的か否かも、個人によって異なるのである。また例えば、5番という名前のシャネルの香水は、名前はただの数詞であるが、この香りを知り、この香りにまつわる思い出があれば、例え命名が5番という数詞であったとしても、この言葉から時空をもつ思い出を想起することができる。また5番の香りを覚えていたら、香りから5番という名前も、個人的な記憶も想起することができるだろう。このケースは、普通名詞であっても、一般的に辞書的な意味だけをもつ場合と、時空を伴う出来事を代表する個人的で特別な意味をもつ場合が存在することを示唆している。

人間の記憶システムに関する認知科学の研究は現在も活発に行われており、包括することは本稿の分析の範囲を超えるものである。しかしながら、ある名詞が単なる辞書的な意味しかもたないか、あるいは個人的な記憶を想起させる手がかりとしての意味も含むかというテーマに限定し、記憶システムの中でどのように位置づけるかを述べることは、本稿にとって必要な議論と考える。

山鳥³⁸⁾が述べるところによれば、「記憶は大きく表象性の記憶と非表象性の記憶に分けられる。表象性とはおおまかにイメージ化できるということである。この記憶はさらに生起性のもの、つまり事象性を持つもの（古くからの日本語で言えばコト記憶）と、物象性のもの、つまり対象概念や意味にかかわるもの（同じくモノ記憶）に分けられる」。

認知科学では一般的に長期記憶において、時間的・空間的枠組みの中で展開する事象性を持つものをエピソード記憶、対象概念や意味にかかわるものを意味記憶と呼んでいる³⁹⁾。山鳥⁴⁰⁾はエピソード記憶について「自己が主人公の自伝的出来事（出来事それ自体）と、メディアを媒介に取り入れられる出来事（出来事の知識）の記憶は、同じエピソード記憶といっても大きく性質が異なることに注意が必要である。後者には意味記憶との移行性が認められる」と述べる。

本稿で問題としているのは嗅覚から想起される記憶であり、現在のテクノロジーではメディア

を通して匂いを嗅ぐことはできないため、嗅覚から想起される記憶は、自己が主人公の自伝的出来事の記憶と考えられる。

さらに本稿にとって貴重な指摘を山鳥⁴¹⁾はしている—「生活の記憶に自伝的な記憶と社会的な出来事記憶を区別する必要があるように、知的な記憶にも個人的な意味の記憶と社会で共有可能な意味の記憶を区別する必要がある」。この指摘は、前述したチョコレートという普通名詞の名前を持つ香りが、一般的に辞書的な意味、社会で共有可能な意味だけを想起させる場合と、個人的で特別な意味を持ち、自伝的出来事記憶を想起させる手がかりとなる場合が存在するということを説明する。

2020年コロナ禍の日本において流行した「香水」という曲は、歌手の瑛人が実体験をもとに作詞作曲したもので、失恋した相手に3年ぶりに会ったときのことを歌っている。かつての恋人が3年前の香水と同じ香水をつけていたので、思い出したくなくても仲が良かったときのことを思い出してしまうという内容が歌われている。香水は「ドルチェ アンド ガッバーナ」の香水であり、その名前が何度か歌のなかで香水を名指すために使われている。「ドルチェ アンド ガッバーナ」はブランドの固有名詞であるが、香水とその固有名詞が固く結びつき自伝的出来事記憶を想起させている。心理学的な実験は試みていないので、断言はできないが、このような場合、香りを嗅がなくても「ドルチェ アンド ガッバーナ」という固有名詞を見たり、聞いたりするだけでも、かつての恋人との出来事を思い出してしまう可能性は否定できない。事実2021年11月4日16時20分から17時50分の日本語Ⅷの授業のなかで、あるマレーシアの学生は恋人が使っていた石鹸「ボディショップ」の「ストロベリー」という名前を見るだけで彼女を思い出してしまうと語っていた。命名された香りにまつわる自伝的出来事が非常に強いものであった場合、香りを嗅がなくても、命名に使われた名詞を見聞するだけで、その名詞が手がかりとなり、自伝的出来事記憶を想起する場合は少なからずあると考える。

4. 詩的機能の一般化

本稿では今まで香りと言語表現の関係を見てきたのであるが、ここで、自伝的出来事記憶については香りに命名された名詞だけでも想起が可能であるということに注目してみよう。言語の観点から考えてみると、前節で考察してきた普通名詞の「ストロベリー」「チョコレート」、数詞の「5番」、固有名詞の「ドルチェ アンド ガッバーナ」も香りと関係なく使う言葉である。3節で詳述したように自伝的出来事記憶の想起を促進させるためには、香りと言葉がともにあった方が、より促進効果は増すであろうが、言葉だけでも自伝的出来事記憶を想起させる場合があるだろう。これまで本稿では香道で使用される和歌や和歌などから引いた言語表現を詩的表現と呼び、「詩的表現」という言葉を厳密に定義しないまま使ってきたが、ここでは本稿の香りとの関係性から見られた詩的表現の特徴について考え、日常言語のなかでの一般化を試みてみたい。

自伝的出来事記憶の特徴は意味記憶と異なり、時空間を持つことである。澤田⁴²⁾は認知言語学の観点から日本語の助詞の「も」の一用法を分析し「詠嘆の「も」の場合は過去における共在感覚を発話時の時空間の共在感覚と重ね、発話時の「今ここ」において、聞き手に過去の時空間を意識させることによって、話し手は協調的コミュニケーションに向かおうと意図していた」と述べた。詠嘆の「も」が使われた文とは、夏休みが終わる頃、ふと秋の気配を感じて発話された「夏も終わるか…」や、自分の子どものある行動から成長したことを認識し発話された「太郎も大きくなったな

あ」など、日常言語でありながら詩的で非常にノスタルジックな情感が込められたものである。詠嘆の「も」を使う話し手は現前の光景、つまり「今ここ」の視覚情報を描写して発話しながら、過去の個人的な思い出、つまり自伝的出来事記憶を想起していたのであり、それによって聞き手にも「今ここ」のみならず過去の時空間を想起させようと意図していた。

本稿で考察してきた香道における詩的表現もまた、「今ここ」ではない仮想の時空や過去の時空を想起させることができた。例えば、3節で見た「烏羽玉」という香銘から三条西は「烏羽玉」によって導かれる仮想の世界にさまざまな想いを巡らせていた。この「烏羽玉」もその背景にある和歌について知らなければ、そこから仮想の世界を想起することはできない。またもし「烏羽玉」の香りを自伝的出来事記憶となっている過去の時空で嗅いだ直接経験があれば、「烏羽玉」という言葉を耳にしたり、読んだりした時に、その思い出を想起し、過去の時空へと想いを巡らすことができるだろう。つまりある言語表現から今ここでない時空を想起できるか否かは、発信者または受信者の背景知識によるというわけである。

渡辺⁴³⁾は、演技という行為の視点を「和歌」に持ちこみ次のように述べる。

「歌を作る作者」といったからといって、何も特別なものを想像する必要はない。言葉に向き合い、取捨選択し、組み合わせで完成させてゆく人のことである。それは「現実の作者」のことではないか、と疑問に思われるだろうか。たしかに、言葉を操る主体ということでは、一面は現実に存在する作者である。しかし歌を、まさに今作りつつある最中のことを考えてみよう。作っている彼（彼女）は、もはや日常生活を行っている、日常的な人間ではないだろう。現実とは別の宇宙を持っている和歌の世界に近づこうとし、そのあげくに引き寄せられて、普段とは別の人格に変化している。和歌的世界の理想に導かれて、本書にいう、儀礼的空間の中で演技するよう求められるからである。

ここで言われる「儀礼的空間とは、複数の人間が、ある区切られた場所の中で、何等かのルールや約束事を共有しながら、特定の役割意識に基づいて行動する空間⁴⁴⁾」のことを指す。

この渡辺の指摘は、本稿が「詩的表現の機能の一端」として定義しようとする主張を補強するものとする。つまり「現実とは別の宇宙を持っている和歌の世界」というタームは、和歌によって今ここではない時空が開かれることを指摘しているからである。

本稿では「詩的表現とは今ここではない時空を想起させる言語表現であり、ある言語表現が詩的表現であるか否かは発信者または受信者の背景知識に依存する」と、詩的表現の機能の一端を定義したい。

さて、最後に渡辺の「儀礼的空間」という規定から、和歌と関係が深かった香道についても考えてみたいと思う。香室の香会はまさに儀礼的空間であり、参加者はその現実の香室という空間のなかで既に非日常を生きている。その非日常の空間において、さらに香銘や組香の証歌に導かれ、香りと詩的表現に導かれた仮想の世界へも行ける可能性があると考えられる。

現実に存在する儀礼的空間、その只中において、香りを鑑賞することで、再び個人的に香りと詩的表現に導かれた想像の世界、仮想の世界、今ここでないイメージの時空へと向かい、その内にたゆたうことができるのだ。さらにその席から離れた後、つまり香会が終わった後で、時間が流れた異なる時空において、当時の香りや詩的表現といった手がかりに思いがけずに出会った時、香会で経験した香りと詩的表現が交差した記憶を思い出すことができる。

詩的表現によって想像を伴い構築される世界は時空をもつ場所であり、緩やかに限定された開けを基盤として他者と語り合うことが可能となる。おそらくこの緩やかに限定された時空というのが、香道では香りの感じ方に対する個人差を許し、他者と語り合うのにちょうど良いコミュニケーションの基盤となるのであろう。

詩的表現そのものが個々の過去の物語と密接に結びつき、ノスタルジックな情動を伴うものであることは非常に興味深い。が、詳述する準備ができていないため、機能の一端を定義するに留まり、稿を改めて考えることにする。ただ匂いについては、記憶との結びつきが強く、情動に直接的な作用を及ぼしており、脳の海馬や扁桃体との関係が強いことは科学的にも明らかになってきているようである⁴⁵⁾。

5. おわりに

本稿では、認知科学的視点から香道を分析し、香りと詩的表現の関係性を明瞭にすることを主目的とし、次の下位目的を設定した。(1)香木の特性を明確化する。(2)香道の鑑賞様式を分析する。(3)香りと詩的表現の関係性を究明する。(4)詩的表現の機能の一端を定義する。

分析結果は以下の通りである。

(1)香木の特性の明確化：香道で鑑賞される香りは沈香、伽羅、白檀という香木であり、いずれも自然のなかで長時間かけて生み出された香り、人工的に作り出されたものではない。ゆえに切り出された木の小片も一つとして同じ香りをもたない。

(2)香道の鑑賞様式の分析：鑑賞の対象である香木の香りは強いものではなく、次の香りを嗅ぎ分けることを妨害するほどには、部屋全体に香りが充満していない。また香炉を手で囲いそのわずかな隙間から香りを鑑賞するために、異なる香りが次々と回ってきても、個人的に聞き（嗅ぎ）分けられる。また香席は十人ほどの集まりであるが、ある一定の時間は参加者の一人ひとりが静かに個人的に集中して鑑賞できるようになっている。個人が香りに集中できる様式が確立されている理由は、香道における組香が参加者に個人として競い合わせるゲーム形式となっていることにも由来する。香道の組香においては、最初に試香を嗅ぎ香銘とともに覚えておき、次に回ってきた香り（香銘を知らされていないもの）について、最初の試香か否かを当てる場合と、いくつかの香りを聞いて、その何番目と何番目が同じであったかを当てる場合があった。これはいずれも選択肢があるので再認の方法と言える。

(3)香りと詩的表現の関係性の究明：香道において香木に銘をつける場合は、香りの鑑賞において経験値が高い人が、和歌など詩的な表現を引用して命銘する。また命銘側ではなく、鑑賞側であったとしても、香席の場は香りを鑑賞する適切な環境が整えられており、場所と時間が特定され、良く知った和歌などの詩的な表現からの命銘がされているために、匂いの記憶に対して促進効果が高いと考えられる。

(4)詩的表現の機能の一般化：嗅覚から想起される記憶は、自己が主人公の自伝的出来事の記憶であったと考えられる。ある名詞で命名された香りにまつわる自伝的出来事が自己にとって非常に強いものであった場合、ある名詞の辞書的な意味記憶だけを想起するのではなく、自伝的出来事記憶も想起する場合がある。また自伝的出来事記憶の想起に関して、香りだけでなく言語表現があった方がより想起しやすいが、言語表現だけでも想起は可能である。つまり、人によっては、ある名詞を手がかりに、時空を伴う自伝的出来事を想起する場合がある。本稿では詩的機能の一端を「詩的表

現とは今ここではない時空を想起させる言語表現であり、ある言語表現が詩的表現であるか否かは発信者または受信者の背景知識に依存する」と定義する。

本稿では、香道における香りの鑑賞の様式に焦点をあてて分析し、考察してきた。香道において香席が十人ほどの集まりであったことには、鑑賞の対象である香木が古来非常に貴重なものであり、ほんの少しの香木の小片であっても、一人でなく、その香りを理解できる人たちとともに鑑賞する方が、他の人の香木も鑑賞でき、より多くの貴重な香木が鑑賞できるというメリットもあったと推測される。

大岡⁴⁶⁾は日本の和歌の世界には何人かが集まって互いに刺激しあう「うたげ」と個人で深化させて歌を作る「孤心」があることを論ずるなかで「歌がその日常的使用のなかで、必要にせまられて言葉の綾や二重三重の意味を含む複雑なものとなってゆき、必然的に歌物語へ、さらに物語へと展開する道をたどる一方で、その複雑な意味を読み解くということだけのためにも、歌人ひとりひとりの中に批評家をいやおうなしに育てていった」と述べている。現代に伝えられる香道における組香は「うたげ」、一人で香りを鑑賞する一炷聞は「孤心」に対応するものであり、やはり和歌と香道の関係は歴史的にも非常に深いと考えられる。

和歌などの詩的表現が指す世界は時空をもち、その時空の広さは個人的な嗅覚の差を許容する。香道の参加者は、詩的表現が構築する世界で、香りについて語り、香りの記憶を共有することができたと考えられる。

形ある具体物、つまり目に見えるものであれば、指示することで表現者と解釈者の間に意味のずれは生じにくい。しかし、香りは形を持たないため視覚によって捉えることができず、嗅覚もまた個人差が大きい。その上、香道で鑑賞する香木は自然にできたものなので、一つとして同じものがない。故に香りを表現し、他者との共感を得られるような緩やかに限定された時空が必要となる。それが香道では和歌などから引いた詩的表現であったというわけである。そのなかで表現者と解釈者は共感を得ることができたのであろう。

澤田⁴⁷⁾は非言語的的情報を身体で感受し、あえて言語化して人に伝えるという現象を考察し、次のように指摘する。

Achievementの学びを他者に伝えたい場合、つまり伝授を目的とする場合は感覚をなんとか言語化して他者に伝えようとする。しかしその感覚は個別のもので話し手自身が他者から聞いたことがない言葉である。他に類のない熟練した作り手しか辿りつけない世界、作り手それぞれが到る個別の到達状態で、他の人間から聞いた世界や状態ではない場合は言葉で説明するのが困難である。ゆえに、しばしば「見える」、「自然の聲が聞こえる」といった可能動詞が使われると推測される。**Achievement**（到達状態）に到った作り手は、自分とは全く一致することはないが、それに近い知覚の到達状態にまで至った他者とは何か感覚を共有できるかもしれないと考え言語化する。他者が学び手であればまだ共有できていない感覚の空間を自分で探って到れるように言葉によって仕向けていると考えられる。

自分の身体で感受した情報を他者に伝えるために、どのような言語表現が使われるのかという問題意識は本稿の底辺にも流れている。日本の工芸や芸道の技を他者に伝える言語表現は非常に情感豊かな表現であることが多く、詩的表現との関係性は非常に興味深い。「暗黙知」を他者に伝える

ための言語表現は今後の大きな課題である。

注

- 1) 本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 3, 2020. 参照
- 2) 筆者は 2006 年より香道について学び始め、御家流の研究会や志野流の香会にも参加している。年に数回は組香を体験しているため、香道に関して一般的な知識を持ち合わせているといっても過言ではない。本稿の参考文献はそういった知識に立脚し選択した「香道」と「香木」の本稿執筆時現在、最も信頼できる記述があるものである。
- 3) 山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 2019.
- 4) 本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 東京, 2020.
- 5) 松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 2012.
- 6) 三条西公正, 香道 歴史と文学, 淡交社, 京都, 1985.
- 7) 『広辞苑』第六版によると、「香り」は良いにおいを意味する。「におい」は良いにおいだけでなく、臭気を含む意味をもつ。本稿においては、「香り」と表記した場合は、一般的に良いにおいを指し、「匂い」と表記した場合は、良いにおいだけでなく臭気を含む意味とする。しかしながら、嗅覚は個人差が大きいので、良いか悪いかの判断は最終的には個人によって異なるを考える。
- 8) 松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 30-34, 2012. 参照
- 9) 同上, 198-199, 参照。本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 151-172, 2020. 参照
- 10) 松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 87-89, 2012. 参照
- 11) 香道においては「嗅ぐ」という動詞を使わず、「聞く」という動詞を使う。本稿においても、「嗅ぐ」を使わず、「聞く」を使用することがある。
- 12) 本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 18, 2020. 参照
- 13) 松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 22-23, 2012. 参照
- 14) 山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 8, 2019 において、「沈水香の定義は、沈香樹の樹内に、樹脂が沈着した部分を指します。その部分が水に沈むか否かは樹脂の沈着度合によります。樹脂が緊密に溜まっていれば沈みますし、薄く溜まっていれば沈みません。そし樹脂の

量と香りの質は相関関係がありません。樹脂の質が良ければ沈まなくても良質品です。香木鑑定において、沈、不沈は一つの目安と考えてください。なお、沈水香の採取は、生木や枯木から採る場合（地上）と、倒木から採る場合（地表）、あるいは倒木が埋まった状態で取る場合（地中）の三通りあります。そして沈水香は産地が広範で種類も多く、個体ごと香味も違います」と述べられている。

- 15) 谷川ちぐさ, 香道を楽しむための組香入門, 京都, 37, 2012. 参照
- 16) 山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 56-57, 2019. 参照
- 17) 本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 133-150, 2020. 参照
- 18) 山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 12-13, 2019. 参照
- 19) マルセル・プルースト, 失われた時を求めて 上, 鈴木道彦・編訳, 集英社, 東京, 48-55, 1992. (Marcel Proust "A la Recherche du Temps Perdu" 1913)
- 20) 山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 10, 2019. 参照
- 21) 松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 87, 2012. 参照
- 22) 木藤才蔵, 連歌史論考 上 増補改訂版, 明治書院, 東京, 2-3, 1993. 参照
- 23) 武居 雅子, 「香道蘭之園」組香と「夫木和歌抄」—「夫木和歌集抜書」との関係について—, 総研大文化科学研究 (11), 総合研究大学院大学文化科学研究科, 10, 2015. 参照
- 24) 本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文, 88, 2020. 参照
- 25) 同上, 18, 参照
- 26) 同上, 17-18, 参照
- 27) 山田松香木店, 「お香」入門, 東京美術, 東京, 76, 2019. より、聞香炉の写真を引用した。山田松香木店の許可有。
- 28) 「香満ちました」という言葉は御家流で主に使われる言葉である。香席とそれを取り巻く環境や香りと空間との一般的な関係については非常に興味深い問題ではあるが、本稿では香席において個人的に香りを鑑賞する様式が整っていることに着目し、その点に焦点をあてて考察を深めていく。香りと空間との考察については稿を改めて詳述したい。

-
- 29) 香木は天然のものであるので、小片であっても完全に一致した同じ香りはないが、一つの香木の塊から切り取った小片は、他の香木の塊から切り取った小片とは異なり、類似した香りを持つため、人間の嗅覚のなかで同じと思える程度の厳密さで組香は行われる。
- 30) 谷川ちぐさ, 香道を楽しむための組香入門, 京都, 19-20, 2012. 参照
- 31) 敬称を略するが、本稿において多くの有益な情報を頂いた山田英夫氏に心より感謝する。
- 32) 澤田美恵子, 京の工芸ものがたり, 理論社, 東京, 60-65, 2015. 参照
- 33) 三条西公正, 香道 歴史と文学, 淡交社, 京都, 98-99, 1985. 参照
- 34) 山本晃輔, 嗅覚と自伝的記憶に関する心理学的研究, 風間書房, 東京, 76-77, 106-107, 2016. 参照
- 35) 同上 7, 参照
- 36) Herz, R.S. & Cupchik, G.C, An experimental characterization of odor-evoked memories in human. *Chemical Sense*.17. 519-528,1992. 参照
- 37) Willander & Larsson, Olfaction and emotion: The case of autobiographical memory, *Memory and Cognition*.35, 1659-1663,2007. 参照
- 38) 山鳥重, 記憶の神経心理学, 医学書院, 東京, 25, 2002. 参照
- 39) 箱田裕司 他, 認知心理学, 有斐閣, 東京, 120, 2010 参照
- 40) 山鳥重, 記憶の神経心理学, 医学書院, 東京, 160, 2002 参照
- 41) 同上, 17. 参照
- 42) 澤田美恵子, 詠嘆の「も」と挨拶語—日本語の共在感覚—, 京都工芸繊維大学学術報告書第13巻, 29, 2020. 参照
- 43) 渡辺泰明, 和歌とは何か, 岩波新書, 東京, 225-226, 2009. 参照
- 44) 同上, 5. 参照
- 45) 外池光雄, 匂い・香りと「行動」の関係, *AROMA RESEARCH*, 1, 2020. 参照

46) 大岡信, うたげと孤心, 岩波書店, 東京, 52-53, 1990. 参照

47) 澤田美恵子, 工芸という文化—自然とモノからの情報の受容—, 社藝堂 7, 社会芸術学会, 101, 2020. 参照

参考文献

Herz, R.S. & Cupchik, G.C, An experimental characterization of odor-evoked memories in human. *Chemical Sense*.17. 519-528,1992.

本間洋子, 香道の文化史, 吉川弘文館, 2020.

木藤才蔵, 連歌史論考 上 増補改訂版, 明治書院, 東京, 1993.

松原睦, 香の文化史～日本における沈香受容の歴史～, 雄山閣, 東京, 2012.

マルセル・ブルースト, 失われた時を求めて 上, 鈴木道彦・編訳, 集英社, 東京, 1992.

大岡信, うたげと孤心, 岩波書店, 東京, 1990.

三条西公正, 香道 歴史と文学, 京都, 淡交社, 1985.

澤田美恵子, 京の工芸ものがたり, 理論社, 東京, 2015.

澤田美恵子, 共在感覚の時空間, 空間感覚の変容, 京都工芸繊維大学, 46-55, 2019.

澤田美恵子, 工芸という文化—自然とモノからの情報の受容—, 社藝堂 7, 社会芸術学会, 91-116, 2020.

澤田美恵子, 詠嘆の「も」と挨拶語—日本語の共在感覚—, 京都工芸繊維大学学術報告書第13巻, 29-44, 2020.

武居 雅子, 「香道蘭之園」組香と「夫木和歌抄」—「夫木和歌集抜書」との関係について—, 総研大文化科学研究 (11), 総合研究大学院大学文化科学研究科, 1-17, 2015.

谷川ちぐさ, 香道を楽しむための組香入門, 京都, 2012.

外池光雄, 匂い・香りと「行動」の関係, *AROMA RESEARCH*, 1, 2020.

渡辺泰明, 和歌とは何か, 岩波新書, 東京, 2009.

Willander & Larsson, Olfaction and emotion: The case of autobiographical memory, *Memory and Cognition*.35, 1659-1663, 2007.

山本晃輔, 嗅覚と自伝的記憶に関する心理学的研究, 風間書房, 東京, 76, 2016.

山田英夫, 香木のきほん図鑑, 世界文化社, 東京, 2019.

山田松香木店, 「お香」入門, 東京美術, 東京, 2019.

謝辞

本稿の査読者、素読者の先生方に、大変有益で貴重な助言を頂いた。
ここに記して心より御礼を申し上げたい。

The Way of Incense and Poetic Expression in Japanese

Mieko SAWADA

Summary

A shared culture exists across the world based on the enjoyment of fragrance. In Japan, a unique appreciation of the essence of scent known as *Kodo*, the incense ceremony, has developed independently. The following essay analyzes the appreciation of incense in *Kodo* from the perspective of Cognitive Science. Within the appreciation of *Kodo* linguistic expressions are thematically utilized that are considered traditionally poetic. The use of this language is understood as a meaningful method to improve a participant's recognition and memory. The imaginative sphere of poetic expression is a world that exists in space-time, and provides the possibility to communicate ideas regarding fragrance based on this culturally shared knowledge of language.

Key Words:

Incense, Poetic Expression, Cognitive Science, Japanese, Recognition, *Kodo*